

今日のみことば

□ 12月18日(日) ルカ 10章

イエスの弟子教育を宣教活動のいろいろな時期における出来事を通して教えられた。70人ほどの弟子を伝道旅行に派遣され、伝道の任務と働きについて心を注ぐべきことを教えられる

□ 12月19日(月) ルカ 11章

弟子たちに祈りを教えられる。主の祈りで模範を示されたが自分の父親に対するように飾らず、神のみこころを受け入れて安心して思いを申し上げればよいと教える。

□ 12月20日(火) ルカ 12章

イエスの弟子となることは何ものにも代えがたい特権です。この世がすべてだと考えている人とは違う。重い煩いのない生活の秘訣を私たちは教えていただいている。

□ 12月21日(水) ルカ 13章

イエスは、神を喜ばせる生活はどのように生きることであるかを教えられた。大切なことは、自分の罪が悔い改められているかどうかを顧みることである。

□ 12月22日(木) ルカ 14章

イエスは弟子三原則を示された。①自己放棄。②自分の十字架を背負って。③自分の全財産と決別。主に従うことは、決して苦痛ではなくすばらしいことです。

□ 12月23日(金) ルカ 15章

主が来られた唯一の目的は、失われたものを尋ねだして救うことでした。ここで語られている三つのたとえ話によっても、そのことが示されている。

□ 12月24日(土) ルカ 16章

イエスのたとえにはいつも注意深くなければならない。「小事に忠実」な人は「大事にも忠実」である。神と富には兼ね仕えることは出来ない。神の国のために友をつくれ。

ろ ぼ No. 1794
2016年 12月18日
日本バプテスト 立川キリスト教会
牧師 大川 博之

イザヤ 9:5

ひとりのみどりごがわたし
たちのために生まれた。

ベツレヘムの馬小屋で一人の赤子が誕生しました。家畜たちに見守られながらの、ほんとうに穏やかな赤子の誕生の風景でした。馬小屋の外は喧噪とした町中でした。誰もが総督の命令で住民登録のためにやって来た人たちでごった返していました。そのような中でどうしてこの馬小屋で生まれた赤子が注目を浴びたのですか。

町中の人たちはだれも見向きもしていませんでした。その馬小屋を羊飼いの群れが訪ねてきました。天の御使いによって約束の救い主の誕生の知らせを聞いたからです。野原で野宿しながら羊の番をしていた羊飼いたちに、天の使いは大声で「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアであ

る」と告げる言葉を聞いたのです。彼らはすぐにベツレヘムを訪ね「布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけて」神に栄光を帰しました。クリスマスの出来事です。

イスラエルの民は、神に選ばれた民として祝福の中に生かされてきました。神はアブラハムを「多くの国民の父とする」と言われ、その民を大いなる祝福の中に顧みてきて下さいました。それに甘えてのし放題がイスラエルの歴史だと思っています。しかし彼らは、それは神のせいだと言いつのって罪を犯してきました。実に神の民イスラエルの歴史は苦悩の中に包み込まれてきました。それでも神は彼らを愛を持って包み込んできてく

ださったのです。その極みがクリスマスだと理解するのです。

これはアブラハムの子孫に起こった出来事として、私たちは静観しているわけにはいかない、造られたすべてのものの出来事なのです。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して神の恵みにより無報酬で義とされるのです」(マ3:23-24)とあります。だれ一人としてこの指摘から逃れ得るものはいません。

預言はこのキリスト・救い主こそ、ベツレヘムの馬小屋で誕生した赤子であると証言をするのです。「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある」(イザ9:5)と。私は今でも日本国中と言っていいほどのクリスマス・ムードに戸惑いを覚えています。すてきなクリスマス・イルミネーションに包まれて癒やされると言います。しかもほんとうのクリスマスをしらに人たちの言葉です。いったい何が癒やされているのでしょうか。

私たちはしっかりと、この赤子の存在を伝えなければなりません。クリスマスに「ひとりのみどりご」が誕生したことをしっかりと語らなければなりません。私たちがほんとうに癒やされるときは、その罪が赦されて、父なる神に受け入れていただくその時だけです。人々はいろんな癒やしスポットと呼ばれるところを訪れては、一時の安らぎに浸っては次を求めます。その私たちに真の平安を赤子イエスを通して与えて下さいましたこの赤子イエスの誕生から、その全生涯を通して神が与えて下さる平安をしっかりと受けさせていたどうかではありませんか

————— 《 聖書の学び・祈祷会 》 —————
詩篇 150 主を讚美せよ

この最後の詩篇は、詩篇全体の頌栄です。「神を讚美せよ」という言葉が各節ごとにあり、最後は「神」ではなく「主を讚美せよ」となっている。地上最大の聖歌隊の合唱である神への讚美によって、天と地は一つになる。ここに、天地創造の聖なる目的が達成されると言うことです。

どこで主をほめたたえようか。その聖所で、またその力ある大空で。地上のどこでも。なぜ主をほめたたえるのか。それはその大能のみわざのゆえに。主ご自身の偉大さのゆえに。どのようにして神をたたえるのか。音楽と、全身全霊によって。だれが主をほめたたえるのか。息のあるものすべてである。

主なる神への讚美は、祭司やレビ人だけでなく、全イスラエルが、全イスラエルだけでなく全人類が、全人類だけでなく全生物が参加せよと。「主をほめたたえよ」とのハレルヤ・コーラスをもって詩篇は終わる。



Read God's Word.